

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第42号

目次

教育学部に関わる史料群寄贈の経緯によせて 久富 望……………	2
京大教員と図書館 渡辺 恭彦……………	4
日誌……………	6

大学文書館の動き：……………	7
荒木寅三郎関係資料を公開しました。	
京都帝国大学のリストラ： 大正後期の行政整理による人員削減 橋本 陽……………	8



木下広次の銅像前に集う学生達（年代不明）

初代附属図書館の閲覧室は1899年に竣工した。閲覧室はアーチを用いた窓から光が射し込むよう設計された。脇には創設に尽力した木下広次総長の銅像が建てられ、図書館が大学の象徴であったことをうかがうことができる。現在、木下の銅像は時計台の左手前にある。（関連記事4～5頁）

教育学部に関わる史料群寄贈の経緯によせて

京都大学教育学部同窓会（京友会）筆頭幹事、教育学研究科助教 久富 望

昨年7月に大学文書館へ寄贈させていただいた史料群は、京都大学教育学部同窓会（京友会）が預かっていたものであるが、その経緯の発端は、京友会の総会（1990年7月14日）にて承認された京都大学教育学部創立40周年記念事業である。この事業の柱の1つが教育史料室の創設であり、次の目的があった。

- i) 教育学部にかかわる歴史的資料を収集、保存し、学部発展の足跡を記録にとどめる。
- ii) 教育研究の観点から見て、意義のある史料（地元の京都府、京都市の教育機関、教育施設等に保存されている教科書、教材、教具、遊び道具、古文書類等）の存在を確認、記録し、体系的に保存につとめる。これらを展示し、将来、教育博物館を構想する。

教授会の了承も得ながら本事業が進められ、i) については数名の元教員のご遺族からの書籍、研究ノート類が寄贈され、ii) については明治、大正、昭和時代の教科書、教師用指導書、教材、教具などを寄託された（注1）。興味のある方は、大学文書館の所蔵資料検索システムを用いるか、京友会のホームページにおいて公開している目録をご覧いただきたいが、たとえば以下のようなものである。

- ・ 鯉坂二夫先生より寄贈された手紙、計12通
- ・ 笈田知義先生より寄贈された、一高から八高をはじめ全国の旧制高等学校等に関する史料、書籍、同窓会による雑誌など
- ・ 旧制初等中等教育に関する書籍・（修身を中心とした）教科書・資料（主に、統廃合により1992年に閉校した教業小学校、立誠小学校より）

当初は史料群の貸出もなされ、1998年にはii)の教育博物館の構想に関わった教員の協力もあり京都市学校歴史博物館が誕生している。しかし、教育学部内の教育史料室や教育博物館の設置は経費やスペースの問題から実現できていなかった。その後、史料群の存在を知る人も徐々に減り、私が2018年に着任して京友会の幹事の仕事（情報関連の助教は慣例的に



京都大学教育学部に関する寄贈史料群
(京都大学大学文書館書庫)

京友会の教員幹事を務めている）を始める際、これらの史料群は教育学部図書室の隅にある鍵の掛かった本棚に保管されていた。専門外の者にも一見して分かる史料群の価値を思えば、京都大学の所蔵物として検索可能な状態にされるべきと前任者も考えていたが、以下の困難があると引き継ぎを受けた。

- ・ この史料群には京友会への寄託物が含まれている。
- ・ 京都大学教育学部と連携している京友会だが、京都大学の組織下にはない。このため、京都大学の管理下に移すには寄託者の許可が必要だが、寄託者には連絡が取れない。

かく言う私も、引き継いでから3年間進めなかった責任を負わなければならない。2021年になって、この本棚は何とかならないだろうかと教育学部図書室から連絡を受け、ようやく経緯の精査に着手した。

調べてみると、史料群には寄贈物も多く、寄託物は2人分だけである事が分かった。この2人には、1991年に京都大学教育学部長・教育学部同窓会長（当時は兼任）の名前で以下のような文書が発行されている。

この度、別紙目録のとおり、貴重な教科書及びその他の図書〔中略〕を御寄託いただきまして誠に有難く、御礼申し上げます。

今後、前記図書が教育学部創立40周年記念事業の一つとして〔中略〕学部における研究・教育の資料として有効に活用したいと存じます。

ここに「御寄託」とあるのが問題である。しかし一方で、この文書を発行した先生へ問い合わせた記録も見つかり、先生からの回答には「当方へ寄贈して頂くことになった」とある。さらに、寄託者の1人が京友会の名簿に見つかった。電話で事情を説明すると寄贈の了承があっさり得られ、それどころか、本人は寄贈のつもりだったと言われた。実際、同時に進めていた目録の確認作業の過程で、この方からの史料群の段ボールの上に「寄贈」と書かれていた。

ここまで来ると最後の寄託物も何とか解決したい。糸口を探そうと（前ページの）寄託者への文書を読み返すと「学部における研究・教育の資料として有効に活用」という文言が目に入った。一番大事にすべきはこの文言ではないか。これが果たせていない現状への痛恨を思うと、自らの責任で、多少の無理はあっても寄贈か寄託かという問題を乗り越えてしまう覚悟が湧いてきた。

覚悟が決まると案外何とかなるものである。この史料群は京友会の事業で集められ、管理しているものの、文書を発行したのは教育学部長兼京友会会長である。このため、大学文書館で管理・運用してもらうのが「学部内における研究・教育の資料として有効に活用」されるために最適という教育学部と京友会の一致した考えのもと、教育学部の親組織である京都大学の一機関である大学文書館に寄贈してよいのではないか。そのように考え、京友会の役員会の後、京友会副会長である研究科長から教授会にて提案いただき、関係する先生方に連絡を取り、最後に京友会の総会で承認を得て、大学文書館へ寄贈させていただく事ができた。

以上が今回の経緯になるが、発端となった40周年記念事業のうち、留学生対象の国際賞や大学院生への研究助成事業は、2019年度からの京都大学教育学部創立70周年記念事業にも引き継がれ、会員・関係各位からの寄附によって支えられている。また、時限的な京友会緊急生活支援事業にも繋がり、コロナ禍における在学生への生活支援金が実現している（2022年2月末現在、延べ106名へ398万円の支援を8回に分けて行っている）。その歴史の初めにあった柱の1つが発展的に整えられた事を、非常に嬉しく思う。

京都大学大学文書館の設置は、1990年代に大学の沿革史料や大学史研究の重要性への認識が全国的に高まる中、京都大学百年史の刊行が終わりに近づいた2000年に、当時の長尾真総長に出された要望書によって具体的な議論が始まり、別で議論が進んでいた情報公開に関する検討も合流し、実現したという（注2）。設立当時になされた大学文書館に関する考察の中に、図書館・博物館・文書館の理念としての役割分担が論じられている。その内容について論じる事は私にはできないが、大前提にあるのは「幸い、京都大学においては、図書館、博物館そして文書館の三者が揃った。」（注3）であろう。図書館の分野への長尾先生による貢献の巨大さは本稿で取り上げるまでもないが、大学文書館は長尾総長のもとででき、長尾先生は総合博物館にも想いを寄せられていた（注4）。亡くなられる前年、コロナ禍という危機に際し、学問研究の大切さに加え、自らの専門外の本や、音楽などの大切さについて熱く語るメッセージを長尾先生が寄せられたこと（注5）を思うと、これら三者が揃った「幸い」の後ろに強い信念のようなものを、私は感じてならない。こういう事に想いを馳せる時、1990年に教育史料室や教育博物館が構想されてから今日までの経緯には、まだ私の知らない、本稿に収まりきらない多くの方の様々な力と想いが詰まっているように感じている。その最後の一端に関わることができた幸運に感謝したい。

（注）

- (1) 京都大学教育学部六十年史編集委員会「京都大学教育学部六十年史（1989-2009）」、2009年、pp.178-179。
- (2) 西山伸「大学文書館設置の経緯」『京都大学大学文書館研究紀要』第1号、2002年、pp.89-101。
- (3) 西山伸「京都大学大学文書館 - 設置・現状・課題 - 」全国大学史資料協議会『研究叢書』第3号「大学アーカイブズの設立と運営」、2002年、p.28。
- (4) 私事で恐縮であるが、理学研究科の修士課程に在籍中、総合博物館の建物で京都大学ミュージアムコンサートが開かれた際（京都大学広報委員会「京大広報」No.574、2002年）、ピアノ・クラリネットとの三重奏などで私はヴァイオリンを弾いており、出席されていた長尾総長の博物館への想いに直接触れるという大きな幸運に恵まれている。
- (5) 長尾真「危機に直面して」国立情報学研究所『4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム』第5回、2020年。（2022年3月14日動画アーカイブ確認）

京大教員と図書館

京都大学大学文書館助教 渡辺 恭彦

大学図書館と聞いて、なにを思い浮かべるだろうか。自習の場所、研究に必要な図書や資料を借りる場所、ときに気分転換の場。近年では研究会を行うスペースも設けられている。人それぞれのイメージがあるに違いない。いずれにしても、学ぶ側にとっては、文献をすぐ手に取ることができるという環境は代えがたいもので、不急のものではあるかもしれないが、不要でないことは間違いない。

今年、京都大学は創立125周年を迎える。中央図書館である附属図書館も、大学創立の2年半後、1899年12月11日に設立され発展を遂げてきた。そのために尽力したのが、草創期の教員たちである。ここでは、教員の図書館人としての顔に焦点を当てて、奮闘ぶりを見てみたい。

一. 木下広次の図書館思想

京大図書館を創設したのは、初代総長木下広次である。木下は、総長になる以前東京帝国大学教授の任にあり、帝大図書館の初代図書管理を兼任していた時期もある。さらに、一般の公共図書館にも目を向けていたことが推測される。

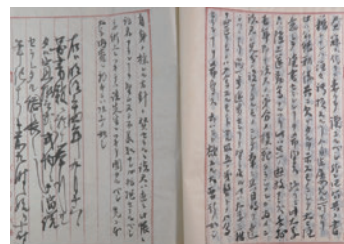
1896年、図書館学者である田中稲城の主張をもとに書かれた「帝国図書館設立ノ議」が外山正一らによって貴族院に提出された。この議案は一般公衆へも開かれた帝国図書館の設立を主張するもので、1897年4月22日の帝国図書館官制公布へと結実することになる。木下の所蔵資料に同資料の写しがあることから、木下の目に触れていたことは間違いないところであろう（京都大学大学文書館所蔵木下広次関係資料「帝国図書館設立ノ議」識別番号木下-II-96）。

1897年6月18日に京都帝国大学が創立されると、京大図書館を設立した暁には一般市民も閲覧できる第二の帝国図書館にするという決意を木下は述べた。これは、「京都全体を大学化」という野心のもとで図書館を構想したものといえよう。一般公開が実現されることはなかったが、大学創設直後から図書の寄贈依頼文書を各方面に送るなど、図書館創設に向ける熱意はスローガンに止まるものではなかった。

図書収集は海外にも及んだ。後に法科大学教官となる岡松参太郎は、木下に命じられて留学先のドイツで洋書の買い付けを行い、ミュンヘン図書館等の有名図書館を視察した様子を現地から木下に書き送っている（木下広次関係資料「木下広次宛岡松参太郎書簡」、1898年7月7日、識別番号木下-52-2）。このとき買い付けられた洋書が、今も利用者を待って学内のどこかに鎮座していると想像してみるのが一興だろう。

当時の閲覧室は、入学宣誓式や貴重書の展示会が行われる場所でもあった。木下総長は式辞で、昼寝の代わりに図書館に来て本を読むことを入学者に勧めており、今読んで身につまされるところがある。

「我が図書館ニハ当時一切ノ書ヲ集メツ、アリ諸君ハ成丈此ヲ我物ト思ヒ昼寝ノ代リニ来リテ読マルベシ」
（木下広次関係資料
〔入学宣誓式における式辞〕、1901年
9月13日、識別番号
木下-I-27）



二. 初代図書館長 島文次郎

木下総長や法科教員と連携して図書館の発展に尽力したのが、東京帝大大学院英文学専攻の学生であった島文次郎である。京都帝大が図書館に関する研究を島に囑託したことに始まり、1899年11月には法科大学に所属しつつ附属図書館長となり、11年間務めた。

さらに、1900年1月、関西文庫協会が設立されると、島はその設立と運営で中心的な役割を果たした。同協会は、図書館業務に従事する者や図書について熱意を持つ者なら誰でも入会できる団体で、近代日本図書館運動の先駆と見なされている。名誉会員として、京都府知事、京都市長や折田彦市第三高等学校長、木下総長をはじめとする京都帝大教員が入会していただけてだけでなく、東京帝大文科大学長の井上哲次郎、帝国図書館長田中稲城、東京帝大附属図書館長和田万吉らが名を連ねており、同協会が東西をつなぐ図書館人のネットワークを作っていたことが分かる。協会は例会の開催や雑誌『東壁』を刊行するなどし

て、図書に関する情報交換を行った。『東壁』には、例会で行われた木下の演説「図書蒐集の必要を論ず」や法科教員による海外図書館の視察報告等が掲載された。4号で終刊したことが惜しまれるが、日本最初の図書館雑誌として記憶にとどめておくべきだろう。

三. 三代目館長 新村出

1911年から25年間という異例の長さで図書館長を務めたのが、『広辞苑』の編集で知られる新村出である。文科大学教授（言語学）との兼任であったが、新村は館長室に常駐し、専任館長といつていいほどの職責を果たした。



京大図書館長室の新村出(1917年2月)
新村出記念財団重山文庫所蔵

京大図書館に特殊文庫を導入したのも新村である。近衛文庫など特殊文庫の大半が新村館長時代に集められ、現在も収められている。国内外の古書を見て回るなどして深められた該博な文献学的知識は、特殊文庫を設置し貴重書の散逸を防ぐことに活かされたといえよう。

図書館の事務を充実させたことも、新村の功績である。1909年12月に菊池大麓総長とともに米国議会図書館を視察したことから、目録作成が急務であることを新村は痛感した。新村は第11回図書館商議会（1916年6月5日）で事務室の建設を提議、1918年3月に竣工された図書館事務室には、目録事務室も設けられることとなった。

特筆すべきなのは、図書館学者である小野則秋や竹林熊彦と新村が親しく交流していたことであろう。兩人からの新村出宛書簡（新村出記念財団重山文庫所蔵）を読むと、小野や竹林が図書館学の研究に注力するようになった背景には、新村の後押しがあったことが分かる。

たとえば新村が序文を寄せた小野則秋『日本文庫史』（1942）は、奈良平安時代から明治大正時代までの日本文庫の通史で、公家の文庫や図書館の歴史をたどったものとしては当時嚆矢となるものであった。小野の文庫史研究は、今日でも続くものがないとされている（根本彰『アーカイブの思想』2021）。

米国ミシガン大学図書館長ビショップ著『目録大綱』を翻訳・出版するにあたって竹林が新村に送った書簡（1932年3月16日）を見てみよう。書簡で竹林は、図書館事業に大過なく勤め得るのは、新村の推挙と後援によるところが大きく、後進引立の意味で序文を執筆するようお願い出ている。事務室建設を提議した新村とともに図書館実務に従事した

ことが、研究上の本業としていた西洋史から図書館学へと踏み込むきっかけを与えたのではないだろうか。

ところで竹林が新村に献呈した『近世日本文庫史』（1943）には、扉に「図書館」、「文庫」、「書庫」「ビブリオテーキ」などのメモ書きがあり、用例を綿密に調べたことが窺われる（大阪市立大学新村出文庫所蔵）。転じて『広辞苑』のページを繰ってみると、「書庫」の項目には「書物を入れておくくら。文庫。」とある。推察するに、新村は辞典編集のために竹林著を参考にしたのではないか。『広辞苑』編者の新村と図書館人の新村がメビウスの環のようにつながるようである。一つの言葉の意味を確定するための執着心、さらには推挙した研究者の仕事に丹念に目を通す真摯な姿勢を垣間見ることができる。図書館学へと舵を切った竹林の研究が文庫史研究へと展開し、その研究が折り返されるように新村の『広辞苑』へと活かされたといえよう。

京大図書館とはすこし離れるものの、新村出の息子である猛と交流のあった中井正一が国立国会図書館の初代副館長を務めたことも、研究者と図書館との関係を考えるうえで興味深い。中井の未発表草稿を見ると、最古のアレクサンドリア図書館から図書館の歴史を辿りつつ、図書館の意義について児童に語っていたことが分かる。「みんな元気なリングの様な顔をして、よい本を、目をきらめかして読んでゐる様子をあたまにうかべて、おじさん達は、何うしても、その日を早く生み出さなければならんと思つてがんばつてゐます。」（京都大学大学文書館所蔵中井正一関係資料「図書館」識別番号中井12-3）

古くはライプニッツやゲーテが貴族の個人蔵書を管理する司書の役割を担っていたことにはじまり、バタイユも図書館員として勤務していた。ふだん何気なく立ち寄る図書館も、多くの先人達に支えられていることを知ると、違って見えてくる。

[参考文献]

- 新村恭『広辞苑はなぜ生まれたか—新村出の生きた軌跡』（世界思想社、2017年）
中井正一著・中井浩編『論理とその実践—組織論から図書館像へ—』（てんびん社、1972年）
根本彰『アーカイブの思想』（みすず書房、2021年）
廣庭基介「続京大図書館史こぼれ話」第一回-第十三回（『大図研京都』2006、7年）
『京都大学附属図書館六十年史』（京都大学附属図書館、1961年）
『近代日本図書館の歩み 本編 一日本図書館協会創立百年記念』（社団法人日本図書館協会、1993年）

[日誌] (2021年10月～2022年3月)

- 2021年
- 10/ 4 西山教授、新採用職員研修において、「京都大学の歴史」「なぜ文書を作る？ - 公文書管理法と私たち」と題して講義。
- 10/11 大学文書館教員会議。
- 10/14 研文社より、秋富克哉『原初から／への思索（副題：西田幾多郎とハイデッガー）』（放送大学開設科目テキスト）で使用する西田幾多郎写真の掲載に関する照会。
- 10/22 NHK より、学徒出陣に関する取材。
- 10/22 山川出版社より、高等学校歴史総合教科書『現代の歴史総合 みる・読みとく・考える』への学徒出陣の写真掲載に関する照会。
- 10/22 学外より、日比孝一（1896年帝国大学工科大学機械工学科卒業）が第三高等学校に在籍した可能性について照会。
- 10/26 テレコムスタッフより、1970年代の京大大学院入試の不合格通知に関する照会。
- 10/29 学内より、大学文書館だより第41号の記事「京大と大典記念京都植物園一理学部附属気象学特別研究所の設置をめぐる一」を理学部地球物理学教室HPの沿革に掲載する旨の申し出。
- 11/ 2 企画展「京大図書館の起源一知の集積地として一」開催（～1月16日）。
- 11/ 8 学外より、『吉本隆明全集』（晶文社刊）の著作年譜・書誌作成につき、1962年の11月祭講演企画「創造と破壊」の照会。
- 11/10 大学文書館教員会議。
- 11/10 学外より、加藤楸邨の頼原退蔵訪問日時を調査するための頼原日記（昭和16年8月25日、10月25日）の照会。
- 11/10 橋本助教、国文学研究資料館主催アーカイブズ・カレッジで「アーカイブズと情報コントロール」を講義。
- 11/15 椽村桂子氏・水渡篤子氏より、高田保馬関係資料追加分の寄贈受け取り。
- 11/18 荘茂樹氏より、御祖父の医師荘豊之祐氏宛て書簡（京大医学部関係者から）の寄贈受け取り。
- 11/24 京都新聞より、第三高等学校の京都移転の事情に関する取材。
- 11/30 法政大学および清水建設技術研究所よりデジタルアーカイブに関する調査のため来館。
- 12/ 1 学習院大学より書庫の見学のため来館。
- 12/ 7 慶應義塾大学メディアセンターから、同センターに寄贈されていた大学ノート2冊の寄贈。京都帝大法学部学生であった中村俊晴（1910～1995）が、当時発禁本になった『日本資本主義分析』を回し読みするために筆写したものの。
- 12/ 8 大学文書館教員会議。
- 12/22 学外より、徳島白菊特攻隊戦没者に含まれる京大出身者2名に関する情報の提供。
- 1/11 毎日新聞大阪本社芸部より、河上肇の肖像写真について照会。
- 1/11 「医学図書館」誌編集委員より、企画展「京大図書館の起源一知の集積地として一」について取材。
- 1/12 有限会社ゴッドキッズより、NHK+とEテレの「ダークサイドミステリー」の再放送で使用する京都帝国大学正門理工科大学本館と松本文三郎の写真掲載について照会。
- 1/12 大学文書館教員会議。
- 1/19 オフィスべんけいより、KBS京都「京の水ものがたり」で使用する田辺朔郎の写真について照会。
- 1/24 京大ソフトテニス部より、京大創立125周年記念事業「京大体育会、まるごと魅せます」（部活動紹介動画）で使用する写真2点（時計台、理工科大学本館）について照会。
- 1/25 京都大学大学院工学研究科分子工学専攻教授 寺村謙太郎氏より、「多良間実験室住所録」寄贈。
- 2/ 3 学外より、馬君武の京大工学部在学時代（1903-06）の記録閲覧につき照会。
- 2/ 4 学内より、学歌冒頭の「九重に花ぞ匂へる」の「九重」の意味について照会。
- 2/ 9 学内より、写真「西本頼」の論文掲載について照会。
- 2/ 9 (株)アリソデナサソより、NHK番組「チコちゃんに叱られる」で使用する写真「上田穰」について照会。
- 2/14 大学文書館教員会議。
- 2/18 大学文書館運営協議会。
- 3/ 2 NHK 京都放送局がニュース630「京いちにち」（3/8放映）で放送するための総合原爆展資料の撮影。
- 3/ 8 法人文書管理に関する監査実施。
- 3/10 総合博物館展示「埋もれた古道を探る」に所蔵資料貸出。
- 3/22 『京都大学大学文書館研究紀要』第20号刊行。
- 3/24 大学文書館教員会議。
- 3/31 オフィスアシスタント立澤めぐみ退職。

大学文書館の動き

荒木寅三郎関係資料を公開しました。

大学文書館では、2022年4月25日より『荒木寅三郎関係資料』を公開しています。

荒木寅三郎（1866～1942）は京都帝国大学が創立された頃から医科大学医化学講座で教育・研究に従事した医化学者です。時計台の右手前にある荒木の銅像からご存じの方もおられるかもしれません。荒木は「生体内乳酸生成の問題」を研究テーマとして世界的な業績をあげると同時に、講義や実験指導で後進の育成にも精力的に取り組みました。

学者としての力量が一級であることに加えて、荒木は1915年から4期14年にわたって総長を務めました。荒木は京都学連事件や河上肇博士の進退問題といった難局を乗り越え、大学文化発展のために手腕を発揮しました。その後も、1929年10月から学習院院長を9年務め、少年寮開設などの功績を残しています。こうした経歴が認められて、1937年には枢密顧問官に親任されました。

本資料は242点からなり、荒木本人の訓示原稿や漢詩、荒木宛の書簡などが含まれています。荒木が入学宣誓式で行った訓示は、紋切り型ではないことで好評を博しており、新聞にも掲載されるほどでした。また、荒木は漢方医学者であった父から漢詩や漢文の手ほどきを受け、後には漢学者に付いて漢学を学びました。漢詩からは詩人鳳岡としての顔も垣間見ることができます。

本資料の大半を占めるのが書簡類です。荒木の活動が多岐にわたっていたことから、書簡の差出人は、野口英世・森林太郎（鷗外）・北里柴三郎などの医学関係者、内藤虎次郎（湖南）・狩野直喜など京大東洋学の創始者、さらには後藤新平・西園寺公望・大原孫三郎といった政界や実業界の人物にまで及んでいます。書簡類は、荒木がさまざまな分野の人物と交流していたことを知るための、有効な手がかりといえるでしょう。

草創期の総長であった頃からおよそ一世紀、この度公開の運びとなった荒木の資料をぜひ御覧いただければと思います。



京都帝国大学のリストラ：大正後期の行政整理による人員削減

京都大学大学文書館助教 橋本 陽

第一次世界大戦が終了し1920（大正9）年に戦後恐慌が起こって以後、日本経済は不況が続くこととなった。その対策として、政府は緊縮財政政策をとり、行政整理を進めた。行政整理には人員整理も含まれ、1925年度以降3年間に4万人以上が退職を余儀なくされたといわれる（大蔵省百年史編集室編『大蔵省百年史』上巻、大蔵財務協会、1969年、317頁）。官立の京都帝国大学（以下、京大）もまたその影響を受け、学内財政の緊縮化を迫られた結果、石炭費などの節約により財政難に対処した（京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』総説編、京都大学後援会、1998年、319-325頁）。一方、人員整理の面での京大の対策についてはあまり知られていない。そこで、京都大学大学文書館所蔵資料により、当時の京大が行なったリストラの一端を見てみたい。

1924年12月24日に文部省から京大あてに、25年の3月15日から4月1日の間に直轄の各部職員の人員整理を予定しているため、1月末日までに該当者の一覧を提出するよう通知が届いた（『行政整理書類

大正十三年度大正十四年度』、識別番号01A05621）。この件について京大側は通知前に情報を得ていたようで、12月8日にすでに教職員の減員方針を立てていた。ここでは、助教授4人、助手10人、書記4人という減員の人数や学部内での内訳が示されている（『整理減員ニ関スル件』、識別番号01A21787）。『行政整理書類』の中に綴じられる『行政整理実施要録』によれば、文官については諭旨退職願いを出させ、それに応じれば昇進した上で特別な退職金が支払われ

た。結局、京大は1月30日にリストラの対象となる助手と書記あわせて12名のリストを提出した。さらに、3月3日には、文学部教授の米田庄太郎、医学部助教授の樋口辰助と林良材の退職および医学部助教授の辻廣の休職が文部省に通知された。これ以外にも3月末までに嘱託員・雇員などが退職に応じた。なお、退職金の支払いは国の公債によって賄われた（『行政整理書類』）。

このような人員整理を進めながら、同時に採用も行われていた。意外な事例が、25年1月の庶務課における櫻井翫の嘱託員採用である（『判任官及雇員進退書類 大正十四年』、識別番号01A05525）。櫻井は前年の12月に行政整理により文部省を退職していたが、京大において人事関連の事務担当者が必要だという理由で採用されていた（『文部省往復書類 自大正十一年至十五年』、識別番号01A00391）。『行政整理実施要録』によれば、行政整理によって退職した者の半年以内の任用は禁止されていた。その後、25年4月1日の閣議決定により、嘱託員の例外的な再就職は主務大臣に「事情ヲ詳細ニ具」せば可能となっていた（『行政整理書類』）。つまり、京大は、閣議決定される前に櫻井を再就職させたことになる。よほど彼の持つ人事関連の事務能力を高く評価したのだろうが、その詳細は不明である。

大正後期に国家単位の行政整理が進められたことで、京大もまた予算縮小化ばかりでなく人員整理も断行しなければならなかった。大学財政の窮乏により事業の規模と教職員の雇用が縮小していく様子は、現代の大学の姿と大きく重なるような気がしてならない。